

花粉症

昨年亡くなられた作家の森瑤子さんは花粉症に十五年も悩み続けた。毎年2月の中旬のある日、空気の中にはほんの微量でもそれが含まれると、まずクシャミがひとつである。それが魔の季節の始まりとなる」という叫びで始まり、遂には「ペンと辞書を片手に持って、花粉の飛んでこない与論島への脱出を余儀なくされたという。

花粉症は主にスギ花粉によるアレルギー性鼻炎で、クシャミから始まり鼻炎特有のひどい症状に悩まされ、あげくに思考力と集中力の低下を招く。都内だけでも百万人を超え、いまや現代の文明病の一つとなっている。東京都公害局の観測によれば、昨年は早い春一番とともに二月六日に初飛来、二月は魔の季節の始まりとなる。

かつて大規模に植林されたスギ林は、いまや壮年期の花粉飛散の適齢期に達して盛んに花粉を放出し続け、今後二十年から三十年は続く。特效薬はなく、ただひたすら時が過ぎるのを待つか、飛散数が少なくなるように

祈るしかない。統計では年間の飛散数が三年周期で多くなつており、今年は三年目の悲惨な年周りに当っている。ところが幸いなことに昨年の冷夏と長雨で花粉の絶対数が少なく、今年の飛散量の予想が「平方センチ当たり年間、百五十から三百個、昨年の三七五六個の一割以下のうれしい激減予想となっている。天国の森瑤子さんも「こんな少ないなら、ここまで逃げなくともよかったのに」とクシャミをひとつとして悔しがっているのだらう。花粉はサヤに覆われていれば無害だが、コンクリートなどに当たると、サヤが壊れて中身が剥がれ鼻の粘膜を襲う。都会のコンクリート化とストレスが花粉症を二層悪化させている。過度の植林と過密な都市化を凶った人間が自然からのしつぺ返しをくらったこととなる。

(村松 照男)